
24人目の救世主

Chereen

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

24人目の救世主

【Zコード】

Z2709Y

【作者名】

Chereen

【あらすじ】

交通事故に遭つて死んだ・・・と思ったのに目が覚めたらベッドの上!? ここどこ? 異世界? 召喚? あ、テンプレってやつですね、わかります。役目はなんですか、ありがちな勇者とかですか? え? 違う? 私を召喚したのが魔王? そんなパターン知りませんよ! な話。にしたかった。前中後編。

幼馴染が蒸発した。

行方不明になつたとか失踪したとかいう意味ではなく（もちろんそういう側面もあるが）、文字通りすうすと消えたらしい。真昼間、衆人環視のもとで。

当然のごとく大騒ぎになつた。輝が蒸発してからしばらく、隣の家にはマスコミの人々が毎日のように詰めかけていてテレビ番組で特集を組まれたりしていたが、1ヶ月もするとマスコミの興味は他に移り（政治家の汚職事件などに）、世間からも忘れ去られていつた。その中で彼の家族は一生懸命活動をして輝を探し続けていたが、半年経つた今でも輝を見つけることは出来ていない。

別の高校に進学した今では、幼馴染といつても輝と言葉を交わすことは少くなっていた私だが、妹の真希ちゃんとは付き合いがあつたのでその関係で暇なときはビラ配りに協力したりしている。

今日も駅前でビラ配りをした帰りだった。毎度のことだが人間の無関心さに打ちのめされていた。今までの自分もそうであった自覚があるためその反応の薄さを責めることはできないが、当事者になつてみるとなかなか堪える。

信号が青に変わったので歩きだす。ふと誰かに呼ばれた気がして立ち止まり、振り返る。誰もいなかつた。気のせいか、と前を向きなおひづとしたその時。目の前に、トラックがあつた。

「由奈ちゃん！」

真希ちゃんが半分悲鳴のような声で私を呼ぶのが聞こえる。ドラマや漫画で交通事故のシーンを見て、なんでああいうときつてみん

な逃げようとしたしないんだろうと思つていたが、その理由が分かつた。身体が、動かないのだ。

「なんことなら高いからって諦めたケーキ食べておくんだつた。」

今にもぶつかるといつその瞬間思い浮かんだのはそんなことだつた。身体がグイッと引っ張られる感じがして、意識がとんだ。意外にも、どこも痛むことはなかつた。

田を覚ますと、ベッドの上だつた。奇跡的に助かつたのだろうか。驚いて、飛び起きる。

周りを見渡すと、見覚えのない広い部屋にいることがわかつた。しかし病院という雰囲気でもない。どうにか分からずに呆けていると、すぐ傍から声がした。

「お田覚めになりましたか。」

ギョッとして声のした方を見ると、金髪碧眼の優男がいた。

「驚かせて申し訳ありません。私はこの国の宰相をしております、パベルといいます。貴方のお名前を伺つてもよろしいですか?」

17年生きてきてこんなに丁寧に話しかけられたのは初めてである。というかこの人の口から流暢な日本語が出てきたことにビックリだ。違和感たっぷり。しかも宰相ってかなり偉い人じゃなからうか。

「あ、私は立花由奈といいます。えっと、じじってどこのなんですか？」

現役高校生の国語力を嘗めてはいけない。正しい敬語の使い方などわからないのでとりあえずですます調で話そつ。

「立花様ですね。驚かせることになると思いますが、じじは貴方のいた世界ではありますん。」

優男・・・もとい宰相さんは、笑顔でトントモ発言をした。

「は・・・？」

「当然の反応かと思います。百聞は一見に如かずとも言いますので、まずはこちらをご覗ください。」

そう言って宰相さんは指を鳴らした。するとその場に水の玉が出現し、シャボン玉のようにふわふわ浮かんで私の前で止まった。宰相さんに促されたのでおそれおそる触つてみると触感はやはり水だった。彼がもう一度指を鳴らすと今度は水の色が変わった。赤・青・黄・・・と田まぐるしく変わっていく姿を目を丸くして見ていると、宰相さんは再び話し出した。

「これら全ては魔法のなせる業です。立花様の世界には無いものだ

と伺っていますがいかがでしょうか？」

私は目の前の事実に納得してコクコクとただ頷くしかなかった。テレビ番組の手品師がこんなことをやってのけているのは見たことがない。ここが私のいた世界と違うのはわかった。もしかして巷で人気の異世界トリップとかいうやつだらうか？

「（）理解いただけたよう有幸です。それでは本題に入りたいと思います。」

宰相さんが真剣な表情を浮かべたので私も居住まいを正した。

「私共が立花様をある目的でこの世界に召喚いたしました。」

ビンゴだ。召喚。異世界トリップものではテンプレといつていいだろう。ある目的とはなんだろ？。魔王討伐とかかな、巫女とか神子とか言われるのかな。意外に思つかもしれないが、私はワクワクしていた。こういった話が大好きなのである。中二病と言つてもいいかもしない。

その時、ノックもしないでドアを開けて大柄な男が入ってきた。作業着のようなものを着ている。金髪で、紅い眼。そして、言つては悪いが、強面である。

「陛下、まだ説明が終わっておりません。」

宰相さんが苦い顔をして言つた。陛下と云つてはこの人は王様か。私は驚きの目でその人を見た。確かに威圧感のようなものはあるが、王様というには些か軽装すぎるのでないか。

「お前の話は長すぎるからな。私が要件を話そう。」

魔王はそう言ってベッドの前に来た。近づくと更に怖い顔をしているが、強面の人気がみんな恐ろしい人なわけではないと身内で知っているので動じない。

「娘、私は魔王だ。私がお前を召喚した。勇者を消すのに協力してもらいたい。」

怖い顔には動じなかつたが、さすがにこれには動搖した。魔王。魔王つてあの魔王だよね？普通討伐される方の魔王だよね？消すつて何？殺人？え、断つたらこれ殺されるの？

私が王・・・いや魔王様を見てポカンとしていると宰相さんがヤレヤレといった様子で口を開いた。

「仰りたいことは沢山あるとは思いますが、まずは話を聞いていただけないでしようか？」

丁寧だが有無を言わさぬ口調だったので、私はとりあえず何も言わないことにした。

宰相さんの話をまとめるとこうなる。

この世界には魔族という種族があつて、この国は魔族の国であること。こちらは平和に暮らしているのに入間の国が定期的に勇者を送り込んで困っていること。人間の国は不都合なことがあると全て魔族のせいにしてしまうが実はそれらは全て人間が引き起こしていること。そうやって魔族を悪者にして国民の意思を操作しているらしさのこと。ほとんどの勇者が洗脳されて魔王討伐に來るので聞

く耳を持つてくれないこと。魔王はこの世界では最強だが勇者はこの世界の理が通じないので魔王に対抗出来ること。なぜこの世界の理が通じないのかというと別の世界から召喚されたからだということ。この勇者に対抗出来る存在として私が喚ばれたこと。

確かに宰相さんの話は長かった。話の途中でウトウトしかけてしまったほどだ。魔王様はとするとその辺の椅子を持つてきて堂々と寝ている。宰相さんの話はまだ続く。

「こきなり召喚してこの国のために働くというのが勝手な話だとうのはわかっています。私どもは鬼や悪魔ではありません。ですから引き受けただいた場合勿論報酬は御座いますし、衣食住や安全は保証致します。貴方が断ると仰るならば今すぐ貴方を元の世界の同じ時間、同じ場所に帰すことが出来ます。こちらの話は以上ですが、質問はござりますか？」

人間の世界で鬼や悪魔だと呼ばれているだろう人たちが言ひ台詞としては少々可笑しかつたが、日本語の言い回しではそうなつてしまふのだろう。元の世界に戻ると聞いて私は安心した。そして少し疑問を抱く。

「あの、なんだか妙に手馴れていませんか？質問が思い浮かばないのですが。それに私の世界についても色々知っているみたいですし。日本語上手ですし。」

すると宰相さんではなく眠っていたはずの魔王様が退屈そうに口を開いた。

「当たり前だろ？ お前で24人目なんだから。慣れもするし言葉を覚えもする。」

「ちなみに前の23人は断られたのでこちらの記憶を消した上で返還させていただきました。」

前までの人たちに相当苦労させられたらしい。来たとたん騒いだり、夢と信じ込んで聞く耳を持たなかつたり、こちらが異世界だと言つても笑い飛ばされたり、喚びだしたのが魔王といつ事實を知つた時点で悲鳴をあげて逃げ出したり襲いかかつてきたり。それで話の仕方を学習したようだ。そうして話をきちんと聞かせることに成功しても皆結局帰ることを選んだようだが。まあ当然だと思う。自分に関係の無いことには無関心な、現代人だもの。

そして今の魔王様や宰相さんの姿は人間の私向きの姿で、本當は違つ姿らしい。人間はカタチが違つものを恐れ、怯え、攻撃してくるか逃げるかするのでこのような姿を取るのだと。この姿で人間の国に行つてもバレないのだと。それなら常にその姿でいいのではと尋ねると、魔力を使つため、平民には使い続けることはできないとのこと。

色々なことを明らかにする魔王様と宰相さんの口調には明らかにダメ元的な雰囲気が漂つてゐる。私も断つて25人目の人に望みを託して欲しいと言おうとしたが、一つ引っかかることがあつた。

「あの、返還つて、同じ時間の同じ場所にしかできないんですか？」

妙な質問だと思つたらしく魔王様が怪訝そうに答える。

「ああ、世界を越える召喚と返還は同じルートでしかしてはいけないことになっているんだ。同じルートを使わいで返還しようとして失敗し、場所は同じだが100年後になつてしまつた例や異空間に放り出すことになつてしまつた例があつてな、そう決まつたんだ。

お前は変な娘だな、今までの奴は同じ時間の同じ場所に戻れると知つて喜んでいたというのに、という魔王様の言葉を聞きながら私はここに来る前の自分の状況を思い出していた。信号無視のトラックに突っ込まれて、事故死寸前。あの場所、あの時間に戻つたら確実に死んでしまう。魔王様の話は正直よくわからなかつたが違う場所や時間には帰せないということは分かつた。

「あの・・・私・・・その話、お受けします。」

死ぬほど驚かれた。今まで23人もの人に断られ続けられていたのだから当たり前の反応かもしれない。

期待とかしないで惰性で召喚していたんだなあと思う。その惰性での召喚で命が助かつた身としては複雑な気分ではあるが。本当にですかと何度も聞く宰相さんに確認する。

「衣食住も身の安全も保証してくれるんですよね? 私一般女子なので何の能力もないのであんまり危険なことはしたくありませんが、安全なことなら。」

そうでなかつたら引き受けたりしない。これは私の生活を守るための戦いなのだ。

「それは」「安心ぐださいーー危険な目に合わせることは絶対にしないと約束します! では本当に引き受けくださいのですね! ああ、ありがとう」「やれーいます!」

宰相さんは意気込んでそう言った。神にでも祈り出しあつた勢いだつた。魔族だけど。

そうして私は魔王様の城にお世話になることになった。部屋は寝ていたその部屋のままで。召喚した人用の部屋だったらしい。とうか今までの一連の会話を全部ベッドの上でしていた事実に後で気づいて恥ずかしくなつた。異常事態で頭が回つていなかつたとはいえて年頃の女子のあるべき姿ではない。

あの後自分の置かれた状況を説明して今回の仕事が終わつても永住したい旨を話すとこちらで過ごすための知識を付けるためにと教育係とか侍女とかつけられました。至れり尽くせりだな本当に！喜ばしいことに異世界トリップでありがちな着替えや風呂のお世話を何人がかりもでされるということはなかつた。あれだけは絶対嫌だと色んな小説読んで思つてたんだよね。今上の魔王様は質素なのが好きらしい。

教育係さんも侍女さんもとてもいい人（いい魔族？）で短い時間だけど色々なことを教えてもらつた。なんでも魔族は超・実力主義で魔王も世襲制ではなく魔力が多く、強いものがなるものらしい。魔力の過多は誕生した瞬間にわかるので、その時の魔王より魔力が多い子が生まれたら城で育て、成人したら代替わりするのだとか。まあ魔族は寿命が長く、繁殖力も弱いので滅多に代替わりはないらしい。今の魔王様もかれこれ536年魔王を務めているのだとか。魔族の成人は50歳らしいから魔王様586歳かー。年増だなー。良かつた寿命が短い種族で、そんなに長生きしたくなので、80年生きれば十分だ。

「でもさー、魔王様を殺して自分が魔王になろうっていう魔は居ないの？普通あるじゃんそういう政争みたいなの。」

魔王様が敬語が気に入らないというので遠慮なくタメ口にした。そもそも魔族の言語には敬語にあたる文法がないのだそうだ。宰相さんも最初に覚えたとおりの言葉を使っているだけで、それが敬語だと後から知つたようだが、結局はじめに覚えたままで話しているらしい。

初対面の偉そうな人にはとりあえず敬語を遣つちゃうっていうのが・・・日本人だなあ、と思つた。

「基本的に自分より魔力が多いものに勝つことは出来ないからな。誰も無駄死にしようとはせん。それに、魔王のようなつまらない仕事を自分からやりたがるやつは居ない。」

ふうん、平和だなと魔王様の言葉を聞きながら、とりあえず前の23人の中に男の人がいて良かつたな、と思う。魔王様みたいなごつい男から女言葉が出てきたらと思うと、ゾッとする。今のセリフを女言葉で言う魔王様を想像するだけで・・・・・・・笑いが堪えきれなくなつた。

「何を笑つてゐる。言え。」

魔王様との謁見中に不用意に笑い声を零した私を待つていたのは、口に出すのも辛い、世にも恐ろしい拷問だった。

魔王様の魔王様による私のための女言葉攻め。はー、笑いすぎて死ぬかと思った。

そんな感じでのびのびと過ごしていたある日、人間の国に潜伏している（平和に生活しているともいう）魔から、勇者パーティがその魔の住んでいる、国境近くの街に訪れたという連絡が入った。ここに来た意味を早くも忘れかけていた私だが、その連絡が入つてすぐに魔王様に仕事を命じられた。その仕事とは勇者と直接交渉をすることだつた。

「え、そんなことでいいの？」

「異世界人の中でもお前ら日本人を喚んだのは勇者の警戒心を少しでも下げる為だからな。あることないこと吹き込まれて洗脳された状況でも似たような境遇の同郷の人間の言葉ならば聞く耳を持つ気になるだろう。魔が直接接触するのは危険だろつ。」

なんでも異世界人が持つ例外の力というのは魔力の無効化で、魔力の塊のようなものである魔は触れられるだけで無力化してしまうのだそうな。

納得した私に魔王様は人型になつた教育係と侍女と一緒に勇者が次訪れるだろう街で待機をするよう言われた。

「周りの取り巻きはエディとミルがなんとかしてくれると思つから、勇者の説得は頼んだわ。今後のためにも絶対悪感情持たれちゃダメよ、しつかりね！」

「この男は今でも突然私を笑わそとと攻撃を仕掛けてくる。

私は黙つて魔王様に近寄り手を伸ばし、彼の腕をしつかりと掴み、仕返しに無力化した彼の足の小指を思い切り踏んでやつた。弱点をバラした奴が悪いのである。

指定された街で待っていると、勇者パーティーはすぐにやつてきた。どれが勇者は言われどもわかる。無駄にキラツキラした顔をした集団の中で一人だけ浮いている、見慣れた、今や懐かしい日本人顔。この外人顔の世界の中では同じ日本人というだけで古くからの知り合いのように見えてくる。

「…………んん？あれ？思い込みでそう見えるだけ？」

その集団が近づくにつれ疑問は確信に変わった。この距離で見間違える筈もない。直接会ったのは1年近く前だが、最近まで何百、何千回と見ていた顔だ。ビルの写真という形で。

「輝ちゃん！あんた何やつてんの！？」

咄嗟に私の口から出たのはそんな間抜けな言葉だった。勇者やってるに決まってるじゃんねえ。

勇者を一眼見るために集まつた人ごみの中でも教育係の力（どうやつたの？って聞いたらニッコリ微笑まれた。なんか黒かった。）で一番前にいた私は思わずバリケードを越えて輝のもとに駆け寄る。面倒そうな顔をしていた輝の顔がこちらを認識した瞬間驚きの色に染まる。

「え、由奈ー！？どう

「×××テル×××××」

キラキラ集団の一人が輝の言葉を遮つて輝の前に出て何か言った。こちらの言葉を勉強し始めたばかりの私には何を言つてているのかわからないが、とりあえず敵意だけは感じる。

気が付けば周りの集団も戦闘体制になつていて。か弱い女子一人になんと過激な集団だ。

やつちまつたーと冷や汗を垂らしていると後ろからため息と、教育係が何かつぶやく声が聞こえた。その瞬間、世界が固まつた。私と、輝と、教育係以外の。

「こんなところで使う予定じゃなかつたんだが。とりあえず邪魔者はいないからゆつくり話してくれ。俺はそのへんで寝てるから話終わつたら起こせよ。止めた時間戻すから。」

どうやら時間を止める魔法を使つたらしい。魔法が効かない異世界人と術者、術者より魔力が強いものだけが動ける魔法。私が今ぶちこわした作戦にあつたから話は聞いている。よく考えられていると感心したものだ。本来もつと人気のない場所で使う予定だつたのだけれど。

こうしてはいられないと私は状況の分かつていない輝を連れてその場を離れる。いくら聞かれていないとはいえ固まつた大勢の人間がいるところで話したくない。怖いし。

とりあえず私たちは再会を喜び、輝の今までの話を聞くことにした。

勇者が輝だつたおかげで思つたよりスムーズに話が進む。

輝はいきなり召喚されて何もわかつていない状態で勇者様だと騒がれ、よく分からないうちに勇者だと国民に公表され、その後話を聞くとあなたには素晴らしい力がある、その力で魔物の脅威に脅かされているこの国を救つてくれ、魔王を倒してくれと懇願されて、仲間たちと一緒に国じゅうを回る旅をしてきたのだといつ。この流れつぱり、さすがN.Oと言えない日本人である。

「だつてよ、元の世界に還す方法はないとか言われたら、この世界でやつていくならこの人らの言つこと聞いておいた方がいいと思うだろ。」

「え？ 還せないって言われたの？ それ嘘だよー。輝、騙されてるよ。私を召喚した人は普通に還せるし実際に何人も還したことあるって言つてたよ？」

『召喚した人』が魔王だとは今は言わない方がいいだろ？

輝は目に見えて怒つている。嘘をつかれるのが嫌いな人間なのだ。昔小さい嘘をついたら1週間くらい無視された経験がある。『召喚した人』が『人』じゃないといつのは嘘になるのかなあ。

「ね、私を召喚した人に聞いてみようよ、輝を還せるかどうか。輝だつて帰りたいでしょ？」

「う・・・ん。還りたいけど・・・いやでも一度引き受けたことだからな・・・。ていうか、還れるならお前は何で帰つてないんだよ。」

「

変にうじうじしている。律儀な奴だ。いや、もしかしたらこいつでお姫様と恋に落ちたりしたのかもしれない。王道だし。そしてもつともな質問である。意識して軽く返す。

「あ、私、還つたら死んじゃうんだよね。トライクに轢かれて。」

それから私も今までのことをかいつまんで話した。魔王様のことを除いたから更に。元々輝ほどこの世界に長くいるわけではないので短い話だ。輝が消えた後の話もした。家族が今も輝を探して一生懸命活動している話すると、堪えきれなくなつたのか、輝は泣い

た。

「ね、やっぱり帰ったほうがいいよ。真希ちゃんたちのためにもや。
きっと帰れるから。私を信じて、ついてきて。」

しばらく決めかねていたようだが、結果、輝はついてきた。本当にそのへんで寝ていた教育係を直接触らないように起こして、話が終わつたこと、輝が一緒に来ることになつたことを伝えると、教育係はひとつ頷いてまた何か呟いた。すると何もないところから小さな小鳥が現れて、大空へと飛び立つていつた。

「今、何したんだ？」

輝が目を丸くして尋ねた。

「我らの主様に客人が来ることを知らせたのさ。初歩の魔法だぞ、今まで見たことないのか？・・・まあいい、それはそうとあいつらはどうする？」

そう言つて教育係はキラキラ集団を指さした。

「こぞ帰らうつてときには騒がれても面倒だし、置いていつてもいいんじやない？あ、でも帰れなかつた時のこと考えたら連れてつた方がいいのかなあ。輝、どう？居たほうがいい？」

正直来て欲しくない。居心地悪いし。魔王様的にも来て欲しくないんじやないかな。

輝はまた少し悩み、しかしあつきつと答えた。

「いや、どちらにしても俺はこつらを裏切ることになる。どうせ別れるならここで一緒だ。」

曖昧な態度をとつているとくくなことにならぬことについて学んだしな、と自嘲するよつて笑う。なんだか妙に説得力のある言葉である。

それから私たちは魔王様のいる城に向かつて出発した。追いかけられても困るのであの街の時間を動かすのは城に着いてからにした。交通手段？もちろん馬車に決まつていて。歩いていくなんて非効率なことしてはいけない。輝は馬車に乗り込むときも後ろの街を気にしていた。やはり気まずい思いがあるのであらう。それとも未練か。私は気がついていないフリをした。

え？ 侍女を忘れてないかつて？ 大丈夫。彼女は魔法の効かない私さえいなければ城まで一瞬で移動できるのだ。

移動中、私は輝がしてきた旅の様子を聞かせてもらうことにした。なんと輝は馬車に乗るのはこれが初めてらしい。いや私も2度目なのでけれども。

魔法で移動することは出来ないし、あの人数が同じ馬車に乗ることは出来ないし、二つに分けるのも警備上の問題で無理、といふことできずつと徒步で旅をしてきたそうだ。

輝はこちらの世界で色々なものを見てきたらしい。その中には美しいものもあつたし、豊かな生活を送つてている現代日本では考えられないものもあつたのだとか。

「色んなとこ回つて色々なものの見られたのは素直に良かつたと思うけどよー、魔物の討伐が目的とか言う割に全然魔物に出くわさなか

つたんだよなー。噂は沢山聞いたけど。実際に見たのが半年旅して3回つてどうよ?俺のこと恐れて隠れているのでしょうかとか言われたけどな。勇者ならモンスターと沢山バトルすんだろうなと思つてたから拍子抜け。盗賊とか山賊に襲われる数の方が多いつてどういひことだよ。」

適当に相槌をうちながら、私はその盗賊とか山賊がやつたことが魔物の仕業つてことになつてゐるんだろうな、と漠然と思つていた。

「しかもいつまでたつても魔王のところに行く気配がないし。今更だけどあいつら場所分かつてなかつたんじゃねえかな。見切り発車で旅に出されたと思つたら結構ムカツクな。」

輝の愚痴はまだまだ続く。勇者にも悩みは沢山あるんだなあ。きっと今まで周りの誰にも言えずに溜め込んでいたに違いない。前はこんなに口数多いほうじゃなかつたと思つんだけどなあ。

「まあ雑魚キヤラ退治をこなしてもないのにいきなりラスボスつてのにも無理があるけどな。」

「…………やうだね。」

これからそのラスボスのところに行く、と告げたらこいつはどうするんだろう。教育係が御者をしていてこの場に居なくて良かつた。居たら絶対居た堪れない空氣になる。

いつ打ち明けるべきだらうか。今のつまに言つておいたほうがいいだらうか。

「輝、あのね、」

「おー、着いたぞ。出でーこ。」

いつの間に止まっていたのだろう。やつぱり今のつむじに真実を打ち明けようとした口を開いたとき、扉が開いた。

出鼻をくじかれ、ガックリしている私をよそに、輝は嬉々として馬車を降りた。その後をのろのろと追つた私の前には、警戒体制の輝と、困った顔をした宰相さんと、ニヤニヤしている教育係、それと全くいつもどおりの魔王様がいた。

「おーーー由奈ーーどうーーーとじだよーーー。」

輝に怒鳴られる。怒りのオーラが田に見えるようだ。今までの短い間に何があつたのかは大体予想がつく。何でここまで出てきているのかは謎だが、どうせ魔王様がまたいきなり「私は魔王だ」とか言つたのだろう。私は思わず頭を抱えた。

「あー、黙つてでーごめん。とりあえず危険はないことは保証するから中で落ち着いて話さない？」

誰が魔王の城なんかでーと輝は憤慨していたが、考えてもみなよ、魔法の効かない私たちにとつて魔王城なんて世界で一番安全な場所だよ？何かあつても相手を無力化出来るんだよ？と言つたら渋々ながらも承諾した。疑いの目線が痛い。

話し合いのために用意したという部屋までの道のりで、輝はムスつとした顔のままでこそそと話しかけてきた。

「おー由奈、お前俺に嘘ついたのかよ。」

「嘘なんてついてないよ。あの人、私が私を召喚したのも本当だし、元の世界に還せるってのも本当。ただ魔王様だって言つと輝の立場的にややこしいから言わなかつただけだよ。」

「誤解をわかつて言わないつてのは嘘と同じだぞ。」

「あー、だからコメントつてば。この後ちゃんと宰相さんが説明してくれるからとりあえずそれ聞いて。向こうは輝に危害加えられないんだから大丈夫だつて。」

「くら小声で話してもこの距離なら全く意味をなさない」ということに輝は気づいていないのだろうか。今の会話は一部始終が全員に筒抜けである。その証拠に前を歩く教育係の肩が笑いを堪えるように震えている。この笑い上戸め。

部屋に着いた。なんと和室だった。座布団が4枚しいてある。私と輝の向かいに机を挟んで魔王様と宰相さんが座り、ドア付近の壁に教育係と何時の間にか帰つてきていた侍女が立つ。どうでもいいけど和室に外開きのドアつて違和感が・・・。

落ち着いたところで宰相さんが事情を話し出す。敬語というのが良かつたのか輝の怒りは目に見えて收まり、話が進むに連れて顔に同情すら浮かぶようになった。

思つていたより受け入れが早いな、まああれだけ不満と疑問持つてたら当然かなー、と先ほどまで馬車の中で聞かされていた愚痴の数々を思い出す。

そうやってほんやりしてこむうちに宰相さんの長い話が終わりそ

うになつていた。あ、魔王様また寝てる。緊張感ないなこの人は。輝はといつと、くそ、あいつら皆で俺を騙しやがつて！と怒りの方向をキラキラ集団とその黒幕に向けたようである。輝、なんか怒りっぽくなつた気がするなあ。

「そういうことですので、私どもとしてはこのまますっとしておいていただけるならそれだけで十分なのです。」

宰相さんは話をそりやつて締めくくつた。私の出番はここからだ。魔王様が寝ているのも構わず話しかける。

「魔王様、輝は召喚されたときに還す方法はないつて言われたらしいの。勇者だから特別なの？魔王様でも還せない？」

私も輝も真剣に魔王様を見つめる。寝ていたはずの魔王様はやつぱりひやんと聞いていたようすで、ゆつくじと田を開けて答えた。

「誰だらうが還すのは簡単だ。大体還せないはずがないのだ。相当力が足りないので限りな。」

「あ、足りなかつたのかもな。その勇者くん、連絡の魔法見て驚いてたからなあ。あれすら出来ない魔術師しかいなつてことだろ。なづく。」

教育係が文字通り横から口を出してきた。そうか、と魔王様がうなづく。

「まあ、還すのは問題ない。ルートは身体が覚えているからな。ただ、こちらに来た時と同じ場所、同じ時間にしか帰れない。それは聞いたか？」

魔王様が輝に直接聞く。私の前で魔王と勇者が交わす初めての会話になる。

「ああ。それで由奈が帰れないんだと聞いた。由奈の説明じゃよくわからなかつたが、理論もな。」

わかりづらくて悪かつたな、と少しムツとする。でも輝は帰れる、という事実の上では、そのくらいの嫌味は赦してやってもいい。問題は全て解決して、場はすっかりなごやかムードだ。ホツとしてお茶請けに置いてあつた和菓子風の菓子に手を伸ばした私は、続く輝の言葉に、驚かされることになった。

「・・・魔王、俺と一緒に、俺が来た時と同じ場所、同じ時間に由奈を還すことは出来ないか?」

輝の時間に帰る。すっかりこの世界でのんびり生きていくつもりになつていて、そんなど思いつきもしなかつた。帰れるなら帰りたい。でも、思わず口を出す。

「ちょっと待つて。輝がいなくなつた時間には、今ここにいる私は別にその時の私が生きているんだよ?一緒に帰つたらその世界には私が2人存在することになつちゃう。そんなのおかしいよ。」

「それは・・・そうかもしれないけど、じゃあお前は帰りたくないのかよ!俺だけ帰して1人で残るつもりなのか?そんなの俺は認めねえぞ!」

何故か輝がものすごく怒つている。

「認めなければどうするの？無理やり連れて帰つて世界をおかしくするの？それとも私と一緒にこつちに残るつもり？」

「うう・・・。ああそうだ、残つてやるよ！-とりあえずここにいれば安全なんだろ？」

「ふざけないで！私は輝の家族がどれだけ輝を想つているのか見てきたんだよ。輝がいなくなつてどれだけ悲しんでるかも傍でずっと見てきたの。無事に帰れる輝が帰らないなんて、そんなこと許せるはずないじゃない！」

言い争いはどんどんヒートアップした。お互いが何を言つているかわからなくなってきたとき、コホン、と魔王様が咳をした。

「何やら色々悩んでいるようだが、心配しなくて大丈夫だぞ？説明が長くなるから詳しいことは言わないが、由奈が勇者の時間に戻つても世界の構造を変えてしまう心配はない。由奈があの世界に着いたとき、あちらの由奈は消え、同一人物が一人存在することにはならない。」

「「え？」」

思わずポカンとする。数秒後、公衆の面前で全力の言い争いをしてしまつたことに気づき、顔から火が出るほど恥ずかしくなつた。

「じゃ、じゃあ、私も元の世界に帰していただけるのですか？」

思わず敬語になる。生まれて初めて人を敬つたかもしれない。

「ああ、問題ない。」

敬語を遣つたからか、魔王様は少し嫌な顔をしたが、きつぱりと答える。

さつさまで喧嘩をしていたことも忘れ、思わず輝と手を取り合つて喜ぶ。

周りの田など、もうどうでもよかつた。

数時間後、私たちはこの世界に来た時の服を着て、魔方陣のようなものの中に立っていた。

あれ、と私は何やら作業をしている魔王様に尋ねた。

「さういえば、私たちに魔法つて効かないんじゃなかつたの？」

「ああ、これは魔力をエネルギーにして発動するが厳密に言えば魔法じゃないからな。お前に説明しても無駄だから、特別な力とでも思つておけ。」

事実だけひひこ言つた。私はふくれつ面をした。

「よし、準備が出来たぞ。由奈、勇者にしつかり掴まれ。絶対に離すなよ、異空間に放り込まれて一度と出て来れなくなるからな。」

そんのは御免だと、私は輝に思つくり抱きつぐ。そしてホラ、輝も！と促すがなかなか掴もうとしてこない。

「それにしても、由奈がいなくなつたら寂しくなるなあ。今からでも考え方がない？俺たちと楽しく暮らさうぜ。」

笑い混じりの声で教育係が言つ。すると輝の腕が私の体に回つた。う、ちよつとキツイくらいだ。でもこれくらいしないと異空間行きかもしれないから我慢我慢。

教育係には嫌ですよ、私は元の世界で楽しく暮らすんです。」ひちも楽しかったですけどね、と返す。

魔方陣らしきものが光り始めた。こちらにいられるのも、きっともうあと少しだ。

「魔王様、色々ありがとうございました。いつもいた間、本当に楽しかつたです。きっと忘れません。」

「ああ、俺も楽しかつた。・・・由奈、最後に一つ言つておきたいことがある。」

真剣な顔で見つめられる。輝の腕に力がこもつた。

「どうか、元気でね。私のこと、忘れちゃイヤよ。」

その声を引き金にしたようにあの、ぐいっと体を引っ張られる感じがした。ニヤつと笑つた魔王様の顔が見える。

あの野郎、最後に爆弾落としていきやがつた。異空間に落ちたらどうしてくれる。忘れられるかコノヤロー！

私は油断すると暴れ出しそうになる腹筋を抑えるため、ぎゅっと田の前のものにしがみついた。上方から、呻き声が聞こえた。

返還は、無事成功した。

しかし私は、こちらの世界に戻る選択をしたことを、早くも後悔し始めていた。

輝がどんな状況で消えたのかと、これが頭からすっぽり抜けていた。

真昼間、衆人環視の下で。

もつと詳しく言つと、輝が通つている男子校の全校集会の真つ最中、ステージの上。

そんなところに急に女子高生が現れたのだ。元々そこに立つていた生徒としつかり抱きしめ合つて。（そう、あの時は命を守るために行為としか思つていなかつたけれど、冷静に見れば正面から抱きあつた形だつたのだ。）

その上、この世界に着いたとき、授業中だつたこつちの私もクラスメイトの目の前で消えたことになる。

そのことに思い至つたとき、顔から一気に血の気がひいた。

これからどうなるかは、輝のときの騒ぎを思えば想像に難くない。

かくしてできれば当たつて欲しくなかつた予想通り、その日から私の受難の日々が始まつたのであつた。

fin.

これにて完結です。
由奈が送る日々がどんな日々になるかは皆様の、ご想像にお任せします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2709y/>

24人の救世主

2011年11月10日18時01分発行